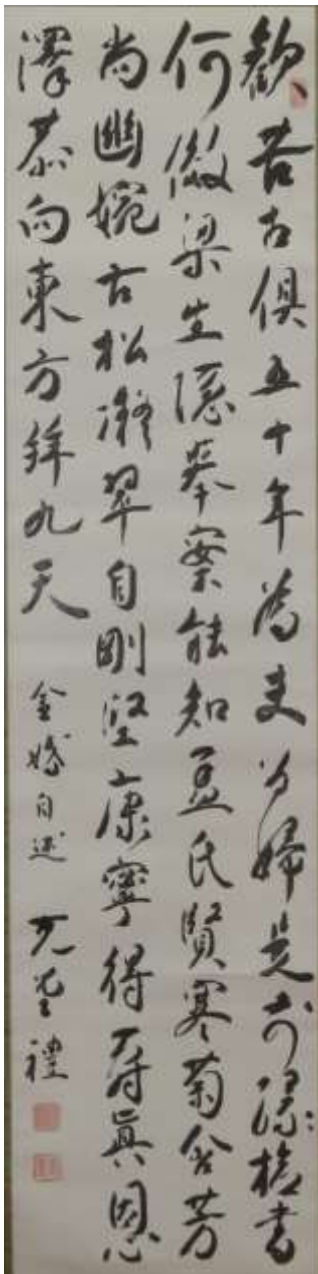


妻に贈るメッセージ

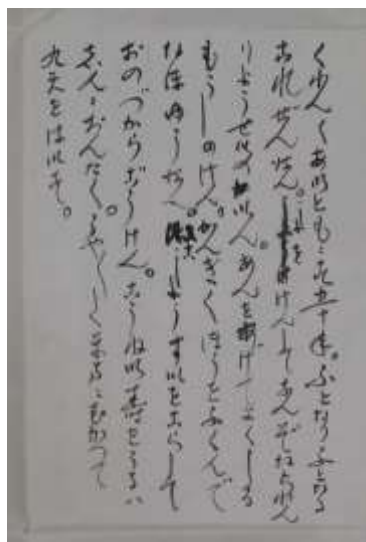
—若槻禮次郎コレクション—

松江市雑賀町出身の総理大臣若槻禮次郎わかつきれいじろうを支えたのは、同じ雑賀町出身の妻徳子とくこです。禮次郎は、叔父で徳子の父である若槻敬けいの養子となり、その縁で二人は結婚しました。禮次郎は、金婚きんこんや古稀こき、病気の平癒よろこに際し、慶びと感謝の気持ちを漢詩にして徳子に贈っています。漢詩を記した色紙には、漢詩を読み下した禮次郎のメモが添えてあり、支えあう夫妻の姿が目浮かびます。

本展では、11月22日の「いい夫婦の日」にちなみ、禮次郎が読んだ漢詩から妻への想いを紹介します。



伊豆の海岸を散策するくつろいだ様子の夫妻



結婚から50年を祝う

禮次郎と徳子が結婚したのは明治24年(1891)7月28日、禮次郎は26歳で帝国大学法律学科に在学中、徳子は20歳であった。結婚以来、よろこ歡びと苦しみを共にし、二人そろって健康に過ごして50年を迎えたことを幸せに思い、金婚に禮次郎はこの漢詩を作る。

この漢詩は掛軸と色紙に記しており、色紙の包紙には漢詩を読み下したメモがある。寄り添いながら読んだのかもしれない。

金婚自述 (若槻禮次郎 書/若槻家所蔵)

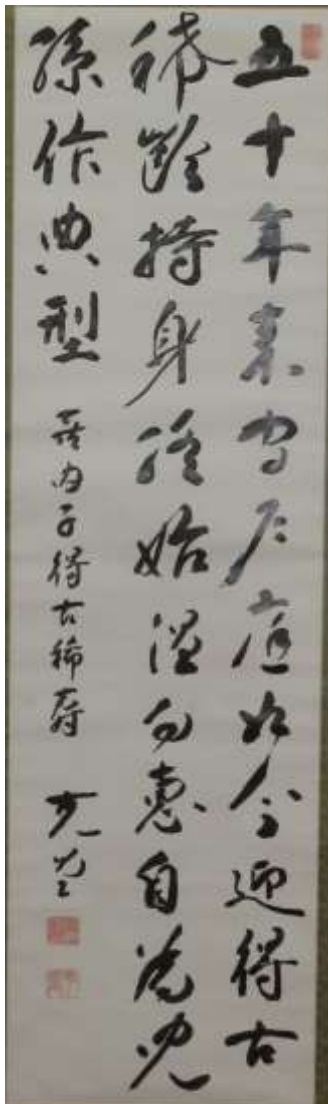
わかつき せいじろう
若槻 禮次郎 (1866~1949)

松江藩の足輕であった奥村仙三郎おくむらせんさぶろうの次男として、松江の雑賀町さいがまちで生まれる。叔父である若槻敬けいの養子となり、敬の娘の徳子とくこと結婚して若槻家を継ぐ。

若くから苦学し、敬の援助を受けて上京、帝国大学（東京大学）仏法科を首席で卒業。大蔵省へ入庁し、大蔵次官を務めたのちに政治家へと転身する。

総理大臣を二回拝命、大正 15 年（1926）1 月に第一次、昭和 6 年（1931）4 月に第二次若槻内閣を組閣した。その後は昭和天皇ほうむつを輔弼する重臣の一人として、一貫して平和主義を貫いた。

平成 30 年（2018）に若槻家より松江市に禮次郎の遺品等を寄贈、寄託され、松江歴史館の若槻禮次郎コレクションとして折々公開している。



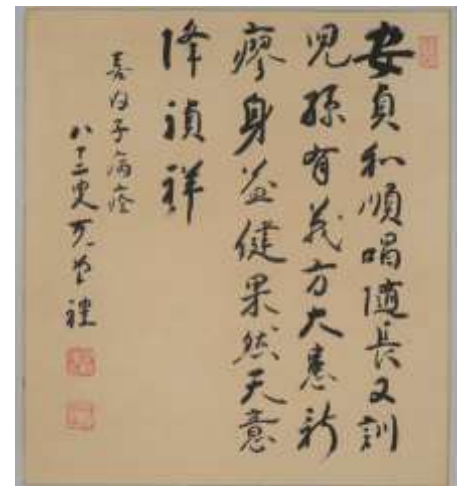
妻の古稀こきを喜ぶ

昭和 16 年 3 月 21 日、禮次郎が徳子 70 歳の誕生日に贈った漢詩である。70 歳（古稀）を祝うとともに、50 年もの間家庭を守り、子どもや孫の模範となってくれたことに感謝していると漢詩に記す。

この漢詩にも色紙と書き下しを記したメモがあり、夫婦でメモを見ながら読んでいたのであろう。

喜内子得古稀寿

(若槻禮次郎 書/若槻家所蔵)



妻の病氣快復を喜ぶ

色紙左端に「八十二そう かくどう 克堂 禮」とあり、禮次郎が 82 歳の昭和 23 年（1948）頃に記した漢詩である。この頃に徳子が大病に罹り、無事に回復したのであろう。そのことを喜び、漢詩として妻を想う気持ちを表した。

禮次郎夫妻は静岡県伊豆において支え合いながら晩年を過ごす。禮次郎は翌年 84 歳で死去する。

喜内子病痊

(若槻禮次郎 書/若槻家所蔵)